

中学生における攻撃性と 特定領域別セルフエスティームとの関連

Relationships between Aggression and Area-Specific Self-Esteem among Junior High School Students

久保元芳^{*1}、吉田沙織^{*2}

KUBO Motoyoshi and YOSHIDA Saori

This study investigated the relationships between aggression and area-specific self-esteem from the viewpoint of “parents,” “teachers,” “community people,” “friends,” and “general” based on a survey on 152 junior high school students (96 males and 56 females). In aggression of “hostility”, both male and female students showed a negative correlation with self-esteem from all viewpoints. As for “physical aggression”, male students showed a negative correlation with self-esteem from “teachers,” “community people,” “friends,” and “general”; and female students showed a negative correlation with self-esteem from “parents,” “teachers,” and “general.” With respect to “anger”, male students showed a negative correlation with self-esteem from all viewpoints. These results have shown that to control aggression in junior high school students, it is effective to help them cultivate and gather positive feelings from individuals who are familiar and important in their lives: parents, teachers, community people, and friends.

Key words : junior high school students, violence, aggression, area-specific self-esteem

中学生、暴力、攻撃性、特定領域別セルフエスティーム

1. はじめに

青少年の健康に関わる現代的な課題として、喫煙、飲酒、薬物乱用、性感染症や望まない妊娠につながる性的行動、暴力、自傷行為などの危険行動が注目されており、それらの防止は学校における健康教育の重要な課題の一つとなっている¹⁾。その中でも暴力は、直接的に他者の健康に危険を及ぼし、いじめや傷害事件等の問題に関わる要素を内在していることから、自己と他者との適切な関係性の形成等を視野に入れた対処が特に求められる危険行動と言えよう。

我が国の青少年における暴力の実態について、文部科学省²⁾では全国の国公私立の小中等高等学校を対象に学校内外での暴力（対教師暴力、生徒間暴力、対人暴力、器物破損）の発生件数について継続

^{*1} 宇都宮大学教育学部、^{*2} 下野市立国分寺中学校

的に調査を行っている。平成19年度の調査では、小学校5,214件、中学校36,803件、高等学校10,739件であることが報告されており、中学校が突出して多い状況にある。発生件数のみで各発達段階における暴力の出現特性を論じることにはできないが、中学生の時期は暴力が顕在化しやすい時期と捉えることができる。そのため、この時期における暴力の出現に関連する要因を把握することは、青少年期全体を通しての暴力の防止策を検討する上で有効な資料となるだろう。

青少年期の暴力に関わる欧米の先行研究では、暴力の出現に関連する様々な要因が特定されてきた。米国公衆衛生局³⁾は、それらの先行研究の結果についてメタ分析を行っているが、そこでは青少年期の暴力の出現に対して影響度の強い個人的な要因の1つとして「攻撃性」が挙げられている。攻撃性とは、一般的に、怒りや敵意などの感情を含む心理的特性のことを指し⁴⁾、「危害行為を生じさせる心的過程または心的エネルギー」⁵⁾ などのような説明がなされていることから、暴力の出現に密接に関わる要因と捉えることが可能であろう。また、攻撃性は、青少年を対象とした社会心理学や精神医学の研究領域において、同時期の犯罪や非行、学校不適応、抑うつ等の出現に関連する要因であることも報告されている⁶⁻⁸⁾。

このように、青少年期の暴力を始めとした様々な問題に関連する要因である攻撃性を抑制するためには、攻撃性と同様、個人の心理特性である「セルフエスティーム」（自尊心、自尊感情）を高めることが有効ではないかと考える。セルフエスティームとは、一般的に、自分自身に対する肯定的な感情として理解されており⁹⁾、多くの教育関係者によって青少年が日常で生じる様々な問題を適切に対処する能力の基盤であると指摘されている¹⁰⁻¹³⁾。近年、青少年の危険行動に関わる国内外の研究において、セルフエスティームは喫煙、飲酒、薬物乱用、性的行動等の出現と負の関連を示すことが報告されている¹⁴⁻¹⁷⁾。しかし、暴力やそれに密接に関わる攻撃性との関連性については十分に検討されてはいない。我が国ではセルフエスティームが高い者ほど攻撃性が低いという負の関連がみられることを示した松原ら¹⁸⁾や松下ら¹⁹⁾の報告等が散見されるが、セルフエスティームを高めることを視野に入れた暴力防止のための教育的なアプローチを構想する上では、未だ十分な知見は得られていないと思われる。

その理由の1つとして、セルフエスティームの認知場面の曖昧さの問題が挙げられる。松下らや松原らの報告では、セルフエスティームの権威ある尺度の一つであり、高い信頼性と妥当性が確認されているRosenbergの尺度²⁰⁾の日本語版が用いられている。しかし、Rosenbergの尺度は自己に対する肯定的感情を全般的に測定するものであるため、得られた知見に基づく教育的なアプローチを構想する場合、対象となる青少年がセルフエスティームを認知するための対象や状況を明確化することが難しいという課題が残る。このような課題を克服するためには、青少年にとって身近で重要な人物である親、教師、地域の人々、友人などからの肯定的感情の認知状況を測定することが重要な意味を持つと考える。

そこで本研究は、中学生における攻撃性と、親、教師、地域の人々、友人、全般の5つの特定領域

から捉えたセルフエスティームとの関連性を検討し、青少年の暴力を防止する教育的アプローチを構想する上での基礎資料を得ることを目的とした。

2. 方 法

1) 調査対象および調査方法

栃木県内の中学校1校に在籍する1～3年生152名（男子96名、女子56名）を対象に、無記名自記式の質問紙調査を実施した。調査は、2007年11月中旬に各クラスの担任教諭を通してホームルームの時間等に行った。その際、倫理面への配慮として、担任教諭に対し生徒の回答中に机間巡視を行わないことや回答終了後に生徒がシール付き封筒に調査票を密封させた上で回収することを求めた。調査票の回収率は100%であった。

2) 調査内容

攻撃性の測定には、「敵意（6項目）」「身体的攻撃（6項目）」「言語的攻撃（5項目）」「短気（6項目）」の4つの下位尺度を有する、嶋田らの中学生用攻撃性質問紙²¹⁾を用いた。この尺度は、攻撃性の多面的特性を考慮した代表的尺度の一つであるBuss-Perry Aggression Questionnaire²²⁾の日本版²³⁾をもとに中学生用に作成されたものであり、信頼性や妥当性が確認されている²¹⁾。回答方法は、各質問項目「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4件法である。本調査データにおける尺度の内的整合性をCronbachの α 係数を算出して確認したところ、「敵意」は男子.83、女子.77、「身体的攻撃」は男子.85、女子.76、「言語的攻撃」は男子.71、女子.70、「短気」は男子.81、女子.82であり、いずれも十分な値を示した。

セルフエスティームの測定には、「親」「教師」「地域の人々」「友人」「全般」の5つの下位尺度（いずれも3項目）で構成される、野津らのセルフエスティーム尺度²⁴⁾を用いた。この尺度は、セルフエスティームの代表的な尺度の一つであるRosenbergの尺度との相関を示す等、信頼性や妥当性が確認されている²⁴⁾。回答方法は、各質問項目「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「とてもそう思わない」の5件法である。本調査データにおける尺度の内的整合性をCronbachの α 係数を算出して確認したところ、「親」は男子.89、女子.87、「教師」は男子.90、女子.88、「地域の人々」は男子.93、女子.91、「友人」は男子.90、女子.84、「全般」は男子.91、女子.86であり、いずれも十分な値を示した。

3) 分析方法

まず、攻撃性、セルフエスティームの各質問項目に対する肯定的回答（逆転項目については否定的回答）の割合について男女別に集計した。次に、攻撃性、セルフエスティームの各概念について高い状況の回答を行った者ほど高得点になるようにスコア化し（例：「とてもよくあてはまる」4点～「まったくあてはまらない」1点、逆転項目はその逆方向でスコア化）、各尺度得点を算出した後、男女の平均得点の差について対応のないt検定を用いて検討した。続いて、攻撃性とセルフエスティー

ムとの関連性についてPearsonの積立相関係数を算出し検討した。さらに、攻撃性を従属変数、セルフエスティームを独立変数とした因果モデルを構築し、構造方程式モデリングによりパス係数やモデル適合度について検討した。なお、統計上の有意水準はすべて5%とした。

3. 結 果

1) 攻撃性尺度の各質問項目の回答状況

表1 攻撃性の各質問項目の回答状況[#]

	男子(%)	女子(%)	全体(%)
「敵意」			
① 私の悪口を言う人が多いと思う	27.1	19.6	24.3
② 友達に、ばかにされているかもしれない	44.8 *	28.6	38.8
③ 人からばかにされたり、いじわるされたことがある	49.0	44.6	47.4
④ 本気でいやだと思う人がたくさんいる	41.7	28.6	36.8
⑤ 友達の中にはいやな人が多い	24.0 *	9.1	18.5
⑥ ふだん仲良くしていても、本当に困ったとき助けてくれない友達もいると思う	59.4	48.2	55.3
「身体的攻撃」			
① たたかれたら、たたきかえす	74.0 *	44.6	63.2
② たたかれたり、けられたりしたら必ずやりかえす	55.2 *	23.2	43.4
③ からかわれたら、たたいたりけったりするかもしれない	44.8 *	17.9	34.9
④ 自分を守るためなら暴力をふるうのもしかたない	58.3 *	26.8	46.7
⑤ 人に乱暴なことをしたことがある	68.8 *	30.4	54.6
⑥ どんなことがあっても、人をたたいたりけったりしてはいけないと思う (R)	51.0 *	19.6	39.5
「言語的攻撃」			
① 友達の考えに賛成できないときは、はっきり言う	51.0	44.6	48.7
② やりたいと思ったことは、やりたいとはっきり言う	59.4	60.7	59.9
③ いやなときは、いやだとはっきり言う	66.3	58.9	63.6
④ じゃまをする人がいたら文句を言う	62.1 *	37.5	53.0
⑤ 友達と考えが合わないとき、自分の考えを通そうとする	25.0 *	10.7	19.7
「短気」			
① すぐにけんかをしてしまう	18.8 *	1.8	12.5
② すぐに怒るほうだ	39.6	50.0	43.4
③ ちょっとしたことでも腹が立つ	37.5	25.0	32.9
④ よく口げんかをする	38.5	28.6	34.9
⑤ 友達とけんかをすることがある	33.3 *	12.5	25.7
⑥ かっとなっても、すぐにおさまる (R)	43.8	35.7	40.8

[#] 各質問に対して「とてもよくあてはまる」と「よくあてはまる」と回答した者の合計割合、逆転項目は「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」と回答した者の合計割合

(R) 逆転項目

* 男女差についての χ^2 検定の結果、有意に高率を示したもの ($p < 0.05$)

各質問項目における肯定的回答（「とてもよくあてはまる」と「よくあてはまる」の合計、逆転項目は「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」の合計）の割合について表1に示す。全体での回答割合について下位尺度別にみると、「敵意」6項目で18.5～55.3%、「身体的攻撃」6項目で34.9～63.2%、「言語的攻撃」5項目で19.7～63.6%、「短気」6項目で12.5～43.4%をそれぞれ示した。回答割合が50%を上回った項目は、「敵意」の「ふだん仲良くしても、本当に困ったとき助けてくれない友達もいると思う」（55.3%）、「身体的攻撃」の「たたかれたら、たたきかえす」（63.2%）、「人に乱暴なことをしたことがある」（54.6%）、「言語的攻撃」の「やりたいと思ったことは、やりたいとはっきり言う」（59.9%）、「いやなときは、いやだとはっきり言う」（63.6%）、「じゃまをする人がいたら文句を言う」（53.0%）であった。

2）セルフエスティームの各質問項目の回答状況

各質問項目における肯定的回答（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計、逆転項目はなし）の割合について表2に示す。全体での回答割合について下位尺度別にみると、「親」3項目で61.2～75.7%、「教師」3項目で25.7～36.8%、「地域の人々」3項目で23.7～33.6%、「友人」3項目で32.9～

表2 セルフエスティームの各質問項目の回答状況[#]

	男子(%)	女子(%)	全体(%)
「親」			
① 私の親は、私を信頼している	60.4	76.8 *	66.4
② 私の親は、私に期待している	58.3	66.1	61.2
③ 私の親は、私を大切に思っている	70.8	83.9	75.7
「教師」			
① 私の学校の先生は、私を信頼している	30.2	48.2 *	36.8
② 私の学校の先生は、私に期待している	27.1	23.2	25.7
③ 私の学校の先生は、私を大切に思っている	36.5	37.5	36.8
「地域の人々」			
① 私の近所に住んでいる人々は、私を信頼している	29.2	32.1	30.3
② 私の近所に住んでいる人々は、私に期待している	26.0	19.6	23.7
③ 私の近所に住んでいる人々は、私を大切に思っている	32.3	35.7	33.6
「友人」			
① 私の友だちは、私を信頼している	44.8	60.7	50.7
② 私の友だちは、私に期待している	32.3	33.9	32.9
③ 私の友だちは、私を大切に思っている	47.9	66.1 *	54.6
「全般」			
① 私は、自分自身に満足している	42.7	33.9	39.5
② 私は、自分自身を大切に思っている	60.4	71.4	64.5
③ 私は、自分自身が好きである	40.6	39.3	40.1

[#] 各質問に対して「とてもそう思う」と「ややそう思う」と回答した者の合計の割合

* 男女差について χ^2 検定を行った結果、有意に高率を示したもの（ $p < 0.05$ ）

54.6%、「全般」3項目で39.5～64.5%をそれぞれ示した。「親」領域では全ての項目で60%を上回り、「教師」および「地域の人々」領域では全ての項目で40%を下回っていた。

3) 攻撃性、セルフエスティームの各尺度得点の男女差

攻撃性では、下位尺度「身体的攻撃」「言語的攻撃」において男子が女子に比して有意に高得点を示し、「敵意」「短気」においては有意差が示されなかった（表3）。セルフエスティームでは、下位尺度「友人」において女子が男子に比して有意に高得点を示し、「親」「教師」「地域の人々」「全般」においては有意差が示されなかった（表4）。

表3 攻撃性の平均得点の男女差

	男子 (n=96)	女子 (n=56)	t 値
「敵意」	14.23 ± 4.13	13.02 ± 3.66	1.81
「身体的攻撃」	16.03 ± 4.00	12.39 ± 3.20	5.80 *
「言語的攻撃」	13.11 ± 2.72	12.00 ± 2.43	2.51 *
「短気」	12.99 ± 4.05	11.93 ± 3.36	1.65

* $p < 0.05$

表4 セルフエスティームの平均得点の男女差

	男子 (n=96)	女子 (n=56)	t 値
「親」	11.22 ± 2.90	12.04 ± 2.36	1.89
「教師」	9.33 ± 2.81	9.91 ± 2.22	1.32
「地域の人々」	9.29 ± 2.66	9.36 ± 2.29	0.15
「友人」	9.86 ± 2.76	10.75 ± 2.08	2.08 *
「全般」	9.82 ± 3.08	10.29 ± 2.46	0.96

* $p < 0.05$

4) 攻撃性とセルフエスティームとの相関分析

攻撃性とセルフエスティームとの各下位尺度得点間の相関係数について表5に示す。攻撃性の下位尺度別にみると、「敵意」は、男女とも全ての領域のセルフエスティームと有意の負の関連が示された（男子 $r = -.33 \sim -.56$ 、女子 $r = -.34 \sim -.54$ ）。「身体的攻撃」は、男子の「教師」（ $r = -.27$ ）、「地域の人々」（ $r = -.25$ ）、「友人」（ $r = -.24$ ）、「全般」（ $r = -.20$ ）、女子の「親」（ $r = -.46$ ）、「教師」（ $r = -.40$ ）、「全般」（ $r = -.38$ ）の各領域のセルフエスティームと有意の負の関連が示された。「言語的攻撃」は、女子の「教師」（ $r = .36$ ）、「地域の人々」（ $r = .30$ ）、「友人」（ $r = .34$ ）の各領域のセルフエスティームと有意の正の関連が示され、他の下位尺度と異なる傾向がみられた。「短気」は、男子では全ての領域のセルフエスティームと有意の負の関連が示され（ $r = -.23 \sim -.30$ ）、女子では全ての領域において有意の関連は示されなかった。

表5 攻撃性とセルフエスティームとの相関係数

攻撃性	セルフエスティーム									
	「親」		「教師」		「地域の人々」		「友人」		「全般」	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
「敵意」	-.33 *	-.38 *	-.42 *	-.52 *	-.36 *	-.34 *	-.56 *	-.47 *	-.37 *	-.54 *
「身体的攻撃」	-.16	-.46 *	-.27 *	-.40 *	-.25 *	-.10	-.24 *	-.26	-.20 *	-.38 *
「言語的攻撃」	.13	.25	.10	.36 *	.06	.30 *	.19	.34 *	.03	.20
「短気」	-.24 *	-.20	-.28 *	-.24	-.23 *	-.13	-.30 *	-.11	-.26 *	-.24

* $p < 0.05$

5) セルフエスティームと攻撃性との因果モデルの検討

セルフエスティームは、青少年が日常で生じる様々な問題に適切に対処する能力の基盤であるという指摘を基に、攻撃性を従属変数、セルフエスティームを独立変数とした因果モデルを設定し、構造方程式モデリングによる検証を行った結果を図1、図2に示す。その際、相関分析においてセルフエスティームと正の関連がみられ、攻撃性の他の下位尺度と異なる傾向が示された「言語的攻撃」については、モデルから除いて分析した。

男子について、「親」「教師」「地域の人々」「友人」「全般」の5つの観測変数から構成される潜在変

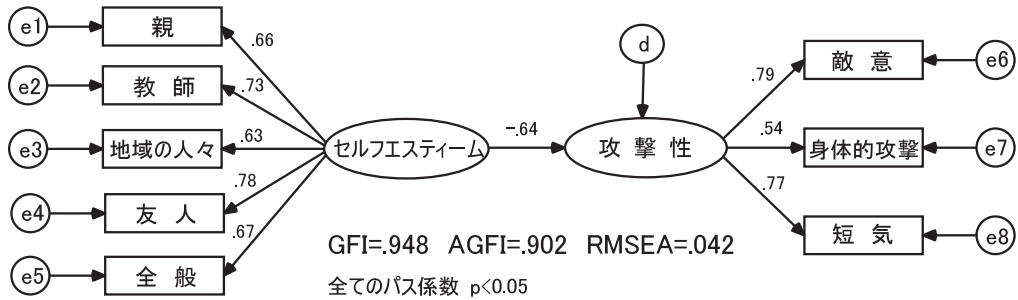


図1 セルフエスティームと攻撃性との因果モデル (男子, n=94)

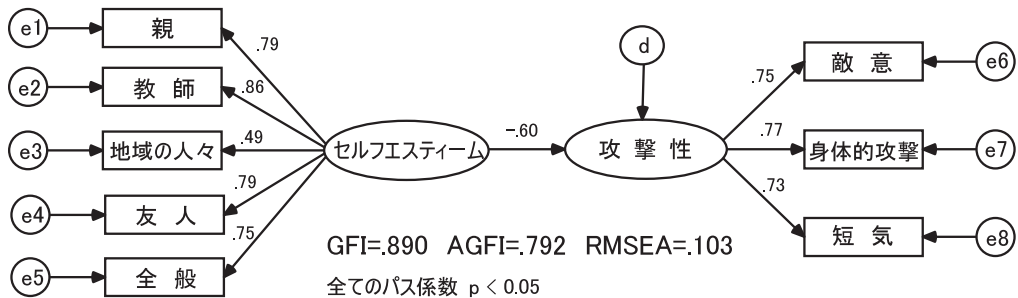


図2 セルフエスティームと攻撃性との因果モデル (女子, n=55)

数「セルフエスティーム」は、「敵意」「身体的攻撃」「短気」の3つの観測変数で構成される潜在変数「攻撃性」に対し、-.64という比較的高い有意のパス係数を示した。モデルの適合度は、GFI=.948、AGFI=.902、RMSEA=.042を示し、いずれも一般的な基準値を満たしていた。女子についても、潜在変数「セルフエスティーム」から潜在変数「攻撃性」へのパス係数は-.60であり、男子と同様の傾向が確認された。ただし、モデルの適合度はGFI=.890、AGFI=.792、RMSEA=.103を示し、いずれも一般的な基準値をやや下回っていた。

4. 考 察

まず、本研究で対象とした中学生における攻撃性、セルフエスティームの実態について述べる。攻撃性尺度の各質問項目において肯定的回答（逆転項目については否定的回答）をした者の割合は、「敵意」6項目で約2～6割、「身体的攻撃」6項目で約3～6割、「言語的攻撃」5項目で約2～6割、「短気」6項目で約1～4割であった。全体的な傾向として、大部分の生徒が肯定的（逆転項目は否定的）に回答するような項目はみられなかったものの、いずれの項目においても自分の攻撃性を認知している者が一定割合みられた。このことから、中学生にとって攻撃性とは特定の生徒のみが持つ心理特性というわけではなく、程度の差はあるが一般的な生徒も持ち得る心理特性であると考えられた。特に、「ふだん仲良くしても、本当に困ったとき助けてくれない友達もいると思う」「たたかれたら、たたきかえす」「人に乱暴なことをしたことがある」「やりたいと思ったことは、やりたいとはっきり言う」「いやなときは、いやだとはっきり言う」「じゃまをする人がいたら文句を言う」の項目については、半数以上の者が肯定的回答をしていることから、中学生の日常生活において認知されやすい攻撃性の内容と言えるだろう。このような現状を踏まえるならば、青少年において攻撃性を生じさせない取り組みというよりは、個人の有している攻撃性を適切にコントロールする能力を育成する取り組みが、彼らの暴力等の問題行動を防止する上でより現実的であると考えられた。

攻撃性の男女差について、本研究では「身体的攻撃」「言語的攻撃」において男子が女子に比して有意に高得点を示し、「敵意」「短気」においては有意差が示されなかった。「身体的攻撃」は、本研究と同じ尺度を用いて中学生の攻撃性を測定した先行研究^{19) 21)}においても、男子の方が高い状況にあることが報告されており、本研究の結果は先行知見と同様の傾向を示した。Maccobyら²⁵⁾は、男女の発達の特性の視点から、男子は遊び集団において開放的で乱暴な競争を行いやすく、身体的で直接的な攻撃行動をとりやすくなる傾向あることを指摘している。本研究で用いた攻撃性尺度の中でも、より行動に近い側面である「身体的攻撃」「言語的攻撃」において男子の得点が高かったことは、この点が反映しているのかもしれない。

セルフエスティーム尺度の各質問項目において肯定的回答をした者の割合は、「親」3項目で約6～8割、「教師」3項目で約3～4割、「地域の人々」3項目で約2～3割、「友人」3項目で約3～5割、「全般」3項目で約4～6割をそれぞれ示し、概して、親からの肯定的感情の認知は高く、教師や地域の人々から

の肯定的感情の認知はやや低い状況にあった。この傾向は、本調査と同じ尺度を用いて全国の高校生におけるセルフエスティームの認知状況について調査した野津らの報告²⁶⁾においても示されていたことから、我が国の青少年に共通した傾向と言えるのではないだろうか。一般的な青少年にとって親は直接的な養育者であり、乳幼児期からの様々な場面におけるかかわりあいによって築かれてきた信頼関係は否定しようがないことから、他の人物よりも肯定的感情を認知しやすかったと考えられる。一方、子どもの学校生活における直接的な指導者である教師からの肯定的感情の認知が低い状況にあったことは憂慮されよう。その原因は様々考えられるが、学校においては学業の達成が主たる目的とされ、価値づけられることが少なくないことから、子どもにとって教師は学業の優劣の評価のみを行う人物として否定的に捉えられた側面があったのかもしれない。地域の人々からの肯定的感情の認知も低い状況にあったことについて、現代の子どもは社会状況の変化により地域住民との関わりが希薄化しているという指摘がしばしばみられるが、本研究の結果はこの指摘を裏付けるものであった。本調査票における「教師」や「地域の人々」という表現は、回答する生徒によってイメージされる人物が多様であったと考えられるが、いずれにせよ、青少年の健全育成において教師や地域の人々とのかかわりあいは重要であり、改善が必要な状況と言える。

セルフエスティームの男女差について、本研究では「友人」において女子が男子に比して有意に高得点を示し、「親」「教師」「地域の人々」「全般」においては有意差が示されなかった。我が国の青少年におけるセルフエスティームの認知状況を調査した先行研究の多くにおいて、男子のセルフエスティームの方が高いことが報告されており^{16) 19) 24)}、本研究の結果は先行知見と異なる傾向を示した。中学生の時期における友人からの肯定的感情は、同性の友人から認知される機会が多いと思われる。本研究で対象とした中学校は小規模校かつ女子の生徒数(56人)が男子(96人)に比して少ない学校であったことから、女子生徒では同性の友人間の結びつきが強く、親密な仲間関係が築かれていたのかもしれない。

続いて、攻撃性とセルフエスティームとの関連性について述べる。本研究では、相関分析の結果、攻撃性「敵意」は男女とも全領域のセルフエスティームと、攻撃性「身体的攻撃」は男子の「教師」「地域の人々」「友人」「全般」、女子の「親」「教師」「全般」の各領域のセルフエスティームと、攻撃性「短気」は男子の全領域のセルフエスティームと、それぞれ有意の負の関連が示された。これは、セルフエスティームが高い(低い)者ほど攻撃性が低い(高い)状況にあったことを示している。また、この関連性を因果モデルに当てはめ、攻撃性を従属変数、セルフエスティームを独立変数とした構造方程式モデリングを行った結果、セルフエスティームは攻撃性に負の影響を与えていることが推定された。わが国では、松原ら¹⁸⁾や松下ら¹⁹⁾が、中学生における攻撃性と全般的なセルフエスティームとの間に負の関連がみられたことを報告しているが、本研究の結果はこれらの先行知見を支持するものであった。Harter²⁷⁾は、セルフエスティームの高い子どもは自分自身の感情をコントロールする能力が高いことを指摘している。本研究の対象者においても、セルフエスティームが高い状況に

あった者は「敵意」「身体的攻撃」「短気」などのネガティブな感情を表出させないことや別の形で表現することができていたと考えることができる。また、攻撃性と密接な関わりをもつ「怒り」の表出過程について説明した岡野²⁸⁾の「自己愛モデル」に基づく解釈も可能であろう。「自己愛モデル」とは、個人が持つ能力や属性に対する一定の自負（自己愛）が他者によって傷つけられた場合に、その他者に対する怒りが表出するというモデルである。自己愛はセルフエスティームに類似した概念であることから、本研究の対象者では、何らかの原因で自己愛が傷つけられた者（セルフエスティームが低められた者）において、他者に対する怒り（攻撃性）が高まった状況にあったと考えることができる。いずれ、青少年の攻撃性の表出や抑制には、彼らのセルフエスティームの認知状況が大きく関わっていることは間違いないだろう。

さらに親、教師、地域の人々、友人等のセルフエスティームの認知場面に着目すると、本研究において示された結果は、セルフエスティームを高めることを通した暴力防止の教育的アプローチの構築を目指す上で、有意義な知見であると思われる。岩田²⁹⁾は、子どもの自尊感情（セルフエスティーム）は親、仲間、教師等との様々なかかわりの中で、それらの人々からの承認や評価を受けることを通して醸成されていくものであること、また、心理的に不安定な思春期において適切な自尊感情を保つためには、ありのままの自己を受けとめてくれる大人の存在や、自分の内心や悩みを自己開示・共有できる友人の存在が重要であることを指摘している。このような指摘や本研究の結果を踏まえると、中学生における暴力の防止のため教育的アプローチとしては、親、教師、地域の人々、友人などのかかわりを通して自己理解や自己表現、他者理解の能力を育む中でセルフエスティームを高め、攻撃的な感情をコントロールできるようにすることが効果的であることが示唆された。

一方、本研究では、女子の攻撃性「言語的攻撃」において、「教師」「地域の人々」「友人」の各領域のセルフエスティームと有意の正の関連が示された。これは、セルフエスティームが高い（低い）者ほど攻撃性が高い（低い）状況にあったことを示しており、他の関連とは逆の傾向がみられた。廣井⁵⁾は、コフートの自己心理学の立場に基づき、攻撃性には、攻撃的な側面に加え積極性や主体性につながる心的エネルギーも含まれていることを指摘している。今回用いた「言語的攻撃」の質問項目としては、「やりたいと思ったことは、やりたいとはっきり言う」「いやなときは、いやだとはっきり言う」など、明確な自己主張とも解釈できる項目も含まれており、攻撃性の中の積極性や主体性に関わるポジティブな側面が子どもたちに比較的強く認知され、同じくポジティブな心理特性であるセルフエスティームと正の関連が示されたのかもしれない。このようなことから、教育者は子どもの攻撃性について対処する時に、それを押さえ込むのではなく、どのようなタイプの攻撃性なのかを判断し、場合によっては積極的で主体的なエネルギーに変換させるような援助を行うことも必要であろう。

最後に、今後の課題について述べる。本研究では対象者数が限られていたことによって、分析方法や分析結果の解釈に限界がみられた。今後、サンプリングや対象者数について再検討し、より詳細な分析を行うことが必要であろう。その際、攻撃性とセルフエスティームとの関連性を基盤としながら

も、攻撃性を適切に対処する上で重要と考えられるコミュニケーションスキルや問題解決スキル等の社会的スキルに関わる変数等も併せて調査し、これらの変数も踏まえた関連性を構造的に明らかにしていくことも望まれよう。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、測定尺度の情報等をご提供いただいた宇都宮大学教育学部の澤田匡人先生、筑波大学人間総合科学研究科の野津有司先生、ならびに調査にご協力いただきました中学校の諸先生方と生徒の皆さんに深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 野津有司, 渡邊正樹, 渡部基ほか: 日本の高校生における危険行動の実態および危険行動間の関連—日本青少年危険行動調査2001年の結果—. 学校保健研究 48: 430-447, 2006
- 2) 文部科学省: 平成19年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査. 2008 Available at: http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111707.htm. Accessed Nov21, 2008
- 3) U.S. Department of Health and Human Services: Youth violence: a report of the Surgeon General. 2001 Available at: <http://www.surgeongeneral.gov/library/youthviolence/default.htm>. Accessed Aug 31, 2008
- 4) 大淵憲一, 北村俊則, 織田信男ほか: 攻撃性の自己評定法: 文献展望. 季刊精神科診断学 5: 443-455, 1994
- 5) 廣井亮一: 子どもの攻撃性に関する一考察—少年非行の現状を通して—. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 12: 137-149, 2002
- 6) 藤掛明: 薬物乱用の「かたち」と「ころろ」. 月刊少年育成 2月号: 8-15, 1997
- 7) 古市祐一, 余公俊晴, 前田典子: いじめにかかわる子どもたちの心理的特徴. 岡山大学教育学部研究収録 81: 121-128, 1989
- 8) 坂井明子, 山崎勝之: 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響. 学校保健研究 45: 65-75, 2003
- 9) 遠藤辰雄: セルフ・エスティーム研究の視座. (遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千壽編). セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求, 8-25, ナカニシヤ出版, 京都, 1992
- 10) Branden N: How to raise your self-esteem. Bantam Books, New York, 5-10, 1988
- 11) Pope AW, McHale SM, Craighead WE: Self-esteem enhancement with children and adolescents. Pergamon Press, New York, 1-166, 1988
- 12) 野津有司: 保健指導と自尊心. 学校体育 48 (12) : 36, 1995
- 13) 樋田大二郎: 学校教育と子どもの自尊感情—社会の変化, 教育政策から考える. 児童心理 862: 30-

35, 2007

- 14) Yanish DL, Battle J: Relationship between self-esteem, depression and alcohol consumption among adolescents. *Psychol Rep* 57: 331-334, 1985
- 15) Murphy NT, Price CJ: The influence of self-esteem, parental smoking, and living in a tobacco production region on adolescent smoking behaviors. *J Sch Health* 58: 401-405, 1988
- 16) 川畑徹朗, 西岡伸紀, 石川哲也ほか: 青少年のセルフエスティームと喫煙, 飲酒, 薬物乱用行動との関係. *学校保健研究* 46: 612-627, 2005
- 17) 川畑徹朗, 石川哲也, 勝野真吾ほか: 中・高校生の性行動の実態とその関連要因ーセルフエスティームを含む心理社会的変数に焦点を当ててー. *学校保健研究* 49: 335-347, 2007
- 18) 松原弘泰, 藤生英行: 中学生における自尊感情の不安定さと攻撃性・うつとの関係. *上越教育大学心理教育相談研究* 4: 25-38, 2005
- 19) 松下加代子, 村松常司: 中学生の攻撃性とセルフエスティーム, 社会的スキルとの関係: *東海学校保健研究* 30: 47-60, 2006
- 20) Rosenberg M: *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press, Princeton, 16-36, 1965
- 21) 嶋田洋徳, 神村栄一, 宇津木成介ほか: 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (2)ー因子的妥当性, 信頼性, 因子間相関, 性差の検討ー. *日本心理学会第62回大会論文集*: 931, 1998
- 22) Buss AH, Perry M: The aggression questionnaire. *J Pers Soc Psychol* 63: 452-459, 1992
- 23) 安藤明人, 曾我祥子, 山崎勝之ほか: 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性, 信頼性の検討. *心理学研究* 70: 384-392, 1999
- 24) 久保元芳, 野津有司, 上原千恵ほか: 青少年の危険行動に関わるセルフエスティーム尺度の信頼性および妥当性の検討. *いばらき健康・スポーツ科学* 25: 1-9, 2007
- 25) Maccoby EE and Jacklin CN: Sex differences in aggression: a rejoinder and reprise. *Child Dev* 51:964-980, 1980
- 26) 野津有司: 青少年の危険行動とその関連要因に関する研究. 平成12~13年度文部科学省科学研究費補助金 研究成果報告書, 2002
- 27) Harter S: Developmental perspectives on the self system. In EM Hetherington (Ed), *Handbook of Child Psychology: Socialization Personality and social development* 4, New York, Wiley, 1985
- 28) 岡野憲一郎: 怒りが発散されるとき, 暴発するとき. *児童心理* 866: 17-23, 2007
- 29) 岩田純一: 自尊感情はどう育つかー乳幼児期から思春期. *児童心理* 862: 18-23, 2007